

1 はじめに一背景と問い

「市内全域屋根も壁もない博物館」というフレーズが印象的な茅ヶ崎市の「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館」事業²は、『ちがさき さわやかプラン』³の成果を生かす実践活動である。

文部科学省はエコミュージアムの定義⁴を、「ある一定の文化圏を構成する地域の人びとの生活と、その自然、文化および社会環境の発展過程を史的に研究し、それらの遺産を現地において保存育成、展示することによって、当該地域社会の発展に寄与することを目的とする野外博物館」としている。茅ヶ崎市はそれを一歩進め、市の課題解決策として、つまり「地域資源を生かしたまちづくり」と「地域活性化・観光のまちづくり」の一手法として導入したのではないか。⁵それは歴史文化や自然風土の保護と継承の取り組みから新たな価値の創出、さらに産業や商業、観光分野とを結びつけ、まち全体の活性化を図ることである。

茅ヶ崎市の「エコミュージアム」設置検討が始まって 20 年余り(表 1)、2024 年(令和 6)10 月に始まった「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館講座(基礎編)」は第 16 期となる。茅ヶ崎市「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館」事業⁶(以下、丸博)を、①設置過程で何を重視し構想・検討されたのか、②継続的な活動とするため何を行っているのか、③広く知ってもらうための取り組みは何か、3 つの視点を通して、茅ヶ崎のいわゆる“都市型”⁷エコミュージアムは何を生み、地域の将来についてどんな展望を示しているのだろうかを明らかにしたい。

2 エコミュージアムの展開—日本へ

エコミュージアムの提唱者リヴィエールは、その目的を「地域社会の人々の生活と、その自然環境、社会環境の発達過程を史的に探求し、自然、文化、産業遺産等を現地において保存し、育成し、展示することを通して当該地域社会の発展に寄与することを目的とする」⁸としている。その象徴的な姿は、リヴィエール自身がその予備調査に携わったフランス「ブルゴーニュ・プレス・エコミュージアム」⁹で見ることができる。そして世界中に設置が広まった後、設置しようとする地域の特性の中で、その性格やタイプは多様化してきた。

日本でのエコミュージアムは 1990 年代になって各地で様々に展開し、4 つに分けられる。1 は自然豊かで地域資源に恵まれた農村地域、2 はかつて地域に繁栄をもたらした産業遺産、3 は文化的な資源、4 は河川の流域や交通を軸に連携する地域の資源を主軸として形成されている。大原一興氏によれば、その展開は 1980 年代後半の「ハコモノは要らない」という公共施設の建設・投資への反省と、1990 年代以降の地域活性化・村おこしの機運に始まり、さらに 1992 年リオデジャネイロ国連環境開発会議の自然環境保全と持続可能な社会づくりへの関心から盛んになったとされる。そして地域の歴史・風土を保全する、地域住民にとってのアイデンティティーを守る考えと、それを包括的に調査し展示するという博物館としてのあり様を結ぶことによって、各地で多様なあり方を生んできた。大原氏は同論考の中で、その有用性は、地域に住む住民のアイデンティティー形成と既存の価値を共有活用することによりネットワークで他者とのつながりを生むこと、そして常に発展し問い直し、変化を続けることだと述べている。¹⁰

日本では、1989 年山形県朝日町¹¹が先進例である。農村地域より始まったエコミュージアムは、茅ヶ崎市では「都市型」が強調され、地域の資源も「都市資源」と称される。この意味を次に考えていく。

3 茅ヶ崎市について

茅ヶ崎市は、神奈川県の中南部に位置し、東は藤沢市、西は相模川をはさんで平塚市、南は海岸線約6キロメートルに及ぶ相模湾、北は寒川町と接している。面積は35.76平方キロメートル(藤沢市:69.6k㎡、平塚市:67.8k㎡¹²)。¹³東京から西に50キロメートルあまり、JR東海道線で東京まで約1時間、横浜まで約30分という都心で働く人々のベッドタウンとして発展し、1947年(昭和22)市制施行時には4,300人ほどであった急速に人口が10,000人を超えたのは1965年(昭和40)、近年は「湘南」をイメージとして移住者が増え、2024年12月1日時点で人口245,294人、108,283世帯が暮らす。¹⁴耕地面積は1.7%であり、その多くが農業漁業以外に従事する(農業漁業従事者は3%に満たない)。¹⁵

4 丸博活動の概要

丸博は2003年(平成15)12月に検討が始まり、2006年(平成18)4月に策定された「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館事業の指針」¹⁶に基づき、市の施策として進められた活動である。指針では、「文化、歴史、自然、産業、商業、公共施設、人材等を幅広く抽出し、調査・研究し、魅力を整理・周知し、相互に関連づけ、活用を図る」とある。先に述べたとおり、市民の多くが1960年代の高度成長期以降の市街化が進む中で移住、現在でもおよそ6割は都心へ通勤通学する。「地域連帯意識の希薄化や、身近な自然と接する機会が少なくなっている、(中略)地域の歴史や文化に接する機会が必要、産業や観光スポットを広く紹介し、本市の商業や産業等をさらに活性化する必要がある」という現状に対する危機意識がある。点在する地域の遺産(その地域にとって価値あるもの)をネックレスのようにネットワーク化し、市域全体として地域づくりに活かしていこうという試み¹⁷のもと、丸博の活動は地域住民が自身の住まう地域に新たな価値を見出し、まちづくりを考える住民を育てることを目指して計画されたものである。丸博の展開過程を、3段階に分けて見ていく。(表1)

第1段階「調査研究段階」: 調査検討委員会の設立 ガイド養成講座 都市資源の選定

第2段階「初期実施段階」: 「丸博アクションプロジェクト」「丸博友の会」(ガイドグループ)活動開始

第3段階「脱却挑戦段階」: 拠点実験(企画展開催) ウェブサイト「Maruhaku TV」



図1「茅ヶ崎市の沿革」より転載

第1段階の要は、指針策定に際し先行する国内の活動「山形県朝日町」と「多摩川エコミュージアム」の視察が行われ、博物館とまちづくりの観点から報告が示されたことである。¹⁸朝日町の場合は1982年(昭和52)に町民が行った自然観察会と文化財めぐり活動を、1989年「朝日町第三次総合開発基本構想策定委員会」発足というまちづくりに取り入れて形成された。後者は川崎市が市民と協働して定めた「多摩川エコミュージアム構想」を基に運営組織をつくり、二ヶ堰せせらぎ館をコア施設として川崎市・国土交通省・各市民団体が委託・受託する形で運営されている。報告は「地域に焦点をあて、地域の資源を学び伝えるという活動は、(中略)地域住民間のネットワーク形成に活用が期待できる」としている。茅ヶ崎市では行政が主導する形で「ガイド養成講座」が始まり、修了者によるまち歩きガイドの受託が事業実践の軸となった。

第2段階では、「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館アクションプロジェクト」が丸博の事業活動を大きく特徴付けている。教育委員会社会教育課長を館長に事務局が組織され、「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館(基礎編)」講座修了生による組織「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館友の会」は散策・ボランティアを担う形で、市民と行政とが協働してより具体的な事業化を目指した。

第3段階の新たな展開は、企画展「丸ごと100—茅ヶ崎を知る100の機会—展」(2014年度)を開催したことである。丸博の特徴はあえて「箱」としての施設を設置することない活動であるが、20年それまでなかった拠点実験を行った。この「丸ごと100」と次年度「丸ごと101」に際し、冊子『わたしの都市資源ノート』を配布したことは、来場者自らが自身の都市資源(茅ヶ崎の価値)を発見してもらう意図であり、一方通行でない交流が見られる。(表2)

活動開始から10年を経過、「丸ごと101」展への来訪者を対象に、市民活動意識と団体間ネットワークの調査が行われた¹⁹。同調査によると、丸博の活動への参加者には茅ヶ崎の歴史・文化への関心が高く、「伝えるべきもの・残すべきもの」との意識高い。それ以外の人々では茅ヶ崎に残る考古遺跡・遺物など歴史には馴染みが薄い一方、「海がある」「自然がある」を地域の価値と評価づけ、自然環境を美化・整備などの活動への関心が高い。この時点での市民活動は同じ系統間での交流に留まっているが、個人・団体ともに地

域に貢献する意識は高いことから、団体や個人のエコミュージアムの通した活動が望まれると結んでいる。また認知度の低かった遺跡(例:「椎の木坂の地層」5%)などを、「歴史がある」「残したい」へつなげる試みであったことがうかがわれる。

こうした活動の休止は2020年初めであるが、その間には新たなメディアを利用した「動画 de「ちがさき丸ごと博物館」」、「お届けエコミュージアム!」のインターネット開催が行われ、友の会では設立20周年に向けた講演会や新たな都市資源の発掘と案内板設置に動いている。一方創設当初より活動を担ってきた事務局・友の会の高齢化も課題となり、活動の幅を考える時期に来ている。

年度	事項	段階
2004 (H16)	ちがさき丸ごとふるさと発見博物館事業検討委員会を組織(構成:各分野有識者および公募市民)	第1段階
2005 (H17)	シンボルマーク決定(市民公募)	
2006 (H18)	第1期「ガイド養成講座」(2005年9月~2008年3月)	
2008 (H20)	第2期「ガイド養成講座」(2008年10月~2011年3月)	
2009 (H21)	「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館」発足(4月)	第2段階
2010 (H22)	ボランティア団体「丸ごと博物館土曜会」発足(9月)	
2012 (H24)	「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館」講座開始	
2013 (H25)	「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館(基礎編)」講座開始	
2014 (H26)	企画展「丸ごと100—茅ヶ崎を知る100の機会—展」(会期:11月21日~2015年2月28日)	第3段階
2015 (H27)	企画展「丸ごと101—茅ヶ崎を知る101の機会—展」(会期:11月22日~2013年1月27日)	
2018 (H29)	企画展「丸ごと101」ファイナル「期間限定!丸博センター」再び!(会期:3月1日~5日)	
2020 (R2)	企画展「丸ごと101」ファイナル「期間限定!丸博センター」再び!(会期:3月1日~5日)	
2021 (R3)	企画展「丸ごと101」ファイナル「期間限定!丸博センター」再び!(会期:3月1日~5日)	脱却段階
2022 (R4)	企画展「丸ごと101」ファイナル「期間限定!丸博センター」再び!(会期:3月1日~5日)	
2023 (R5)	企画展「丸ごと101」ファイナル「期間限定!丸博センター」再び!(会期:3月1日~5日)	
2023 (R5)	企画展「丸ごと101」ファイナル「期間限定!丸博センター」再び!(会期:3月1日~5日)	

名称	つながるちがさき	つながるちがさき2013	丸ごと100-茅ヶ崎を知る100の機会	期間限定！丸博センターへようこそ！	丸ごと101-茅ヶ崎を知る101の機会	お届けエコミュージアム！松林丸ごとふるさと発見博物館	お届けエコミュージアム！Vol.2南湖ザミュージアム	つながるちがさき2020	お届けエコミュージアム！おうちで”丸ごと博物館”
開催年度	2012 (H24)	2013 (H25)	2014 (H26)	2015 (H27)	2016 (H28)	2017 (H29)	2018 (H30)	2019 (H31/R1)	2021 (R2)
会場	市内全域	市内全域	市内全域	市民ギャラリー	茅ヶ崎ショッピングセン	松林公民館	南湖公民館	市役所本庁舎	インターネット
開催日数	67	67	100	5	101	6	6	6	31
内容	テーマ「冬の茅ヶ崎」	テーマ「秋の茅ヶ崎」	講座・講演会・まち歩き・調査研究参加	コース巡り・講座と連携する展示・写真展	講座・講演会・まち歩き・調査研究参加	講座・まち歩き・スタンプラリー・写真展・ガリバーマップ	講座・ガリバーマップ・写真展・スタンプラリー	講座・まち歩き・子どもワークショップ・都市資源展示	企画展「茅ヶ崎を知る」「茅ヶ崎を歩く」「茅ヶ崎を再発見する」「ちが
その他	ガイドブック「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館手帖」	ガイドブック「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館手帖」	冊子『わたしの都市資源ノート』		冊子『わたしの都市資源ノート』		スタンプラリー付きの企画展プログラム	ガイドブック『つながるちがさき2020』	

5 神奈川県内のエコミュージアム

神奈川県内では、2001年(平成13)に「ソフトなまちづくり」として県内7カ所でエコミュージアム化の動きが活発になった。同年3月26日の神奈川新聞の記事『地域の魅力「丸ごと」博物館に』では「市民が頭と足を使って地域の自然、文化、風俗、歴史などを掘り起こし、地域の魅力を、あたかも1つの博物館のようにネットワークしていこう」としてその取り組みを紹介している。²⁰「神奈川県内のエコミュージアム」(表3)は、神奈川県内における「エコミュージアム」の組織や運営体制、活動との比較である。

先に紹介した「多摩川エコミュージアム」(川崎市)は、市制70周年記念事業「地球市民会議 水と緑分科会」での提言を契機に1997年(平成13)「多摩川エコミュージアムプラン」構想として策定された計画である。現在NPO法人化(2002年6月設立)し、「市民活動を中核とするプランの推進」として「水辺の楽校」は各地で独立的に活動し、それを体現する活動となっている。

平塚市「エコミュージアム金目まるごと博物館」²¹(以下、金目エコ)は、金目地域²²に残された自然環境や歴史的遺産を活かしながらの「まちづくり」を地域住民と平塚市が協働して行っている活動である。行政側の丁寧な対応が見られ、地域住民や各種団体への説明会・協力要請、また情報デスク「エコ・デスク」を金目公民館内に設置するなど地域の声を聞きとる機能が働いている。2011年(平成23)6月発行「金目エコだより」(金目エコミュージアム広報委員会発行)創刊号²³には、金目エコの構成と事業が記されている。平塚市博物館との継続的連携が行われ、活動に参加する意義につながり、広く活動がわかりやすい。

金目エコの活動は茅ヶ崎市の丸博とほぼ同時期に始まった。活動内容にも類似するものが多い。大きな違いは、コア(核)として機能する常設の施設があり、平塚市博物館との連携がある²⁴という点である。実際に活動する会員にとっては大きな違いとはならなくとも、一般市民からその活動が見えていることは重要であろう。

ここで「都市型」の強調という差別化はどのような意味をさすのかを考えてみたい。茅ヶ崎市は表3に上げた平塚市金目地域や相模原市城山地域より市街化が進んでいる。しかし海、海水浴やサーフィンという環境だけではなく、北部には里山公園や谷戸(茅ヶ崎では谷と称する)、河川には多くの生きものが生息する自然があり、縄文時代の遺物や律令期の役所跡などの古くから人の生活が確認されている。“都市化している”地域の歴史や風土を改めて知り、その価値に気づき、地域への愛着を育むことが市の未来をつくると

考えている。つまり丸博は、都市にあって“ふるさと”をつくろうとする試みである。今後は企画展の新たな地域での開催など周知を広げながら、異分野団体との連携を模索することが課題と考えられる。

6 おわりに

エコミュージアム活動の肝は「地域住民」である。文部科学省の定義には続きがあり、その中で強調されているのは協働・自己認識・未来展望である。社会状況は大きく変化、地域や自治体独自のまちづくりが求められているからこそ、市民の自主的な行動のもとに、市民と行政が連携し、それぞれの知恵と責任でまちづくりに取り組む「市民協働型まちづくり」が、これからの持続的な活動へつなげていく鍵となる。そこには地域づくりと生涯学習が一体化し、上下関係のない、地域博物館との連携が求められる。そして、リヴィエールが「エコミュージアムは進化する」と明言したように、エコミュージアムの魅力は均質化からの脱却である。ルールを時にはみ出し、新たな価値を生み出そうとすることが将来に「つながるちがさき」であろう。

表3 神奈川県のエコミュージアム

名称	ちがさき丸ごとふるさと発見博物館	金目エコミュージアム	まるごと博物館城山エコミュージアム	多摩川エコミュージアム
設立(年)	2006	2007	2003	2002
対象地域	茅ヶ崎市	平塚市金目地区	相模原市城山地区	川崎市多摩川流域
運営・活動主体	教育委員会社会教育課・丸博友の会	金目エコミュージアム	城山エコミュージアム運営委員会(合併前「城山町エコミュージアムを育てる会」)・生涯学習課	NPO法人多摩川エコミュージアム
特色施設/コア施設	●	●	●	ニヶ堰せせらぎ館
地域公共施設との連携	△	金目公民館	城山公民館	
シンボルマーク/イメージキャラクター	○	●	○	
施設内展示	期間限定	●	○	○
地域資源発見の取り組み	○	○	○	○
街中看板・案内(地図)	○		○	
その他情報発信	ウェブサイト「Maruhaku TV」/「動画de「ちがさき丸ごと博物館」」	『金目エコだより』/ガイドブック(歴史・自然景観・産業)/ウェブサイト	機関紙『城山エコミュージアム通信』/ツアーガイドブック/古地図作成/ウェブサイト	情報誌『エコ・たまがわ』・ウェブサイト
事業活動項目	運営部会/調査研究部会/ガイド部会/広報部会/子ども部会	情報イベント部会/自然・景観部会/産業部会/歴史・文化部会/本部事業部会	ツアー部会/昔の写真部会/古道部会/道標部会/通信部会	環境、歴史、水循環、丘陵、情報、ニヶ堰せせらぎ館管理、水辺の楽校、地域、河川漁業、まちづくり
その他活動内容	ボランティアガイド/	景観巡り/出前授業/自然体験/「可奈比塾」/公民館・博物館事業との協働企画	エコミュージアムツアー/昔の写真の収集・展示会の開催/古道の調査記録・地図作成	水や緑を中心とした環境学習や研究、そして市民ボランティアの育成など市民活動を支援する機能、インターネットや新聞の発行、
基礎調査	○	○	○	○
準備委員会・検討会設置	○	○	○	○
住民ボランティア育成	講座開催	随時募集	随時募集	○
類似・異分野団体との連携	●			○
評価	○=あり △=過去にあり現存なし ●=なし			
参照	『ちがさき丸ごとふるさと発見博物館』, 茅ヶ崎市, https://www.city.chigasaki.kanagawa.jp/bunka_rekishi/hakubutsukan/index.html			
	『金目エコだより』, 平塚市, https://www.city.hiratsuka.kanagawa.jp/kyoiku/page-c_01234.html			
	『城山町エコミュージアム通信』, 相模原市, https://www.city.sagamihara.kanagawa.jp/kosodate/1026602/kyoiku/			
	NPO法人多摩川エコミュージアム, https://www.seseragkan.com/npohoujin/index02.html 「多摩川エコミュージアムプラン」, 川崎市, https://www.city.kawasaki.jp/kurashi/category/29-5-16-1-7-0-0-0-0.html			

- ¹ 「エコミュージアム」は、エコロジーとミュージアムを結びつけた博物館の新しい考え方である。1960年代にフランスに始まるが、公式には1971年フランスのディジョンで開催されたICOM(International Council of Museums: 国際博物館会議)第9回博物館総会にて使われた「エコミューゼ(ecomuse)」が最初である。提唱者はジョルジュ・アンリ・リヴィエール(1897~1985)
- ² 「ちがさき丸ごと博物館」へようこそ, 茅ヶ崎市, (参照 2024年12月16日)
https://www.city.chigasaki.kanagawa.jp/bunka_rekishi/hakubutsukan/
- ³ 「いつでも、どこでも、だれでも、なにからでも」をスローガンとする『ちがさき・まなびプラン』に掲げられたまちづくりの目標。『ちがさきさわやかプラン 茅ヶ崎市新総合計画後期基本計画』, 茅ヶ崎市, 2005
- ⁴ 「エコミュージアムについて」, 文部科学省, <http://www.mext.go.jp>chousa>shougai>shiryo/> (参照 2024年12月16日)
- ⁵ 福留強「エコミュージアムの形成過程と開設の手順」, 聖徳大学生涯学習研究所,
https://www.tunagari.jp/_userdata/kiyo/10/02fukutome.pdf (参照 2024年12月16日)
- ⁶ 『ちがさき丸ごとふるさと発見博物館事業の指針』, 茅ヶ崎市, 2006
- ⁷ 茅ヶ崎市ホームページ「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館」の紹介文より。茅ヶ崎市, 前掲注2
- ⁸ 日本エコミュージアム研究会『エコミュージアム・理念と活動—世界と日本の最新事例集—』, 牧野出版, 1997
- ⁹ 「ブルゴーニュ・プレス・エコミューゼ(Ecomusee de la Bresse-Bourguignonne)」は、フランス東部ブルゴーニュ地方最東部プレス地方全体を対象地域に、ピエール・ド・プレス城をコア施設として活動。1980年にリヴィエール等による予備調査開始、地域遺産の「財産目録」作成が始められた。常設展示ギャラリー、6つのサテライト、7つの水車小屋を含む発見コースにより構成・管理されている。「過去の記憶を現在に位置づけ、未来に活かす」という理念のもと、常に地域の「記憶を取り戻す」場として機能している。
- ¹⁰ 大原一興「日本におけるエコミュージアムのこれまでとこれから」, pp75-82, 『2003年度年報』, 財団法人かながわ学術研究交流財団, 2004.7
- ¹¹ 2000年「NPO法人朝日町エコミュージアム協会」発足、「朝日町エコミュージアムコアセンター創遊館」開館
- ¹² 「平成30年度市町村要覧」, 神奈川県,
<https://www.pref.kanagawa.jp/docs/v2x/cnt/f6833/30youran.html> (参照 2024年12月16日)
- ¹³ 「茅ヶ崎市の沿革」, 茅ヶ崎市, <https://www.city.chigasaki.kanagawa.jp/> (参照 2024年12月16日)
- ¹⁴ 「統計で見るちがさき」, 茅ヶ崎市, <https://www.city.chigasaki.kanagawa.jp/profile/tokei/index.html> (参照 2024年12月16日)
- ¹⁵ 「市町村の姿 グラフと統計でみる農林水産業 神奈川県 茅ヶ崎市」, 『わがまちわがムラ』, 農林水産省,
<https://www.machimura.maff.go.jp/machi/> (参照 2024年12月16日)
- ¹⁶ 「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館事業の指針」, 茅ヶ崎市, 前掲注2
- ¹⁷ 高橋絵里「エコミュージアムにおける展示方法に関する研究—地域資源のネックレス化に着目して—」, pp41-44, 『文化資料館調査報告26』, 2017
- ¹⁸ 須藤格「朝日町エコミュージアム、多摩川エコミュージアム視察報告—ちがさき丸ごとふるさと発見博物館の可能性—」, pp59-66, 『文化資料館調査報告15』, 2007
- ¹⁹ 宮崎貴弘「市民活動意識と団体間ネットワークの展開の考察—茅ヶ崎市におけるエコミュージアムの可能性に関する調査から—」, pp57-60, 『文化資料館調査報告25』, 2016
- ²⁰ 「県内7カ所でエコミュージアム化 地域の魅力「丸ごと」博物館に」, p2, 神奈川新聞, 2001. 3.26
- ²¹ 2005年(平成17)7月14日の政策会議で職員採択され、翌年度に社会教育課を担当事業課として、現地視察会、地域住民の認識、地区自治会や各種団体への説明会・協力要請など丁寧な調整が行われた。「金目まるごと博物館エコ・デスク通信」は平塚市社会教育課エコ・デスク金目公民館内制作として発行、その活動状況を細やかに伝える。
- ²² 金目地域は、平塚市の西北に位置し、人口約18,200人、14の自治会で構成される地域である。
- ²³ 「金目エコだより」, 平塚市, https://www.city.hiratsuka.kanagawa.jp/kyoiku/page-c_01234.html (参照 2024年12月16日)
- ²⁴ 「金目の魅力多角的に」, p22, 神奈川新聞, 2014. 3. 16, 「地域の魅力を発掘、紹介 エコミュージアムとコラボ」, p15, 神奈川新聞, 2014. 7.25